

4-4				
主題	事例検討を継続する事で生まれるケアの充実と職員の変化についての研究			
副題	認知症ケア、終末期ケアの充実や職員のスキルアップにどのように繋がったか			
キーワード 1	看取りケア	キーワード 2	職員の変化	研究(実践)期間 60ヶ月

法人名・事業所名	社福) 練馬区社会福祉事業団 富士見台特別養護老人ホーム			
発表者(職種)	小出 麻子(介護職員)、前川 翠(介護職員)			
共同研究(実践)者	江波戸由利(看護職員)、加地奈々美(介護職員)、三船花乃子(介護職員)			

電話	03-5241-6010	FAX	03-5241-1760
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	緑の多い閑静な住宅街に位置する、56床(ショートステイを含む)の従来型多床室の施設です。施設内には通所介護事業を併設しています。近隣は練馬区一番の高齢化地域です。施設は認知症になっても安心して暮らせる地域の核になれるよう、連携・協働しての運営に取り組んでいます。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

施設入所のお客様の多くが認知症である。認知症ケアにおける職員の対応能力を高めるため、平成26年より事例検討を行うことになった。事例検討会ではお客様が安心してその人らしく暮らしていけるよう、まず初めにお客様の困りごとを明確にした。次に、お客様の困りごとを職員全員で共有し、統一したケアを行う事でお客様の困りごとの解決を目指したが、終末期の方の事例検討に取り組む事は無かった。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

認知症の方の終末期ケアにおける職員の対応能力の向上によってより統一したケアが出来る事でお客様の生活に快の部分が増加し、安心してその人らしくありのままの姿で暮らしていけるようになる。その為に、事例検討会を通してお客様への理解を深めケア方法が浸透し全職員で関わられるように取り組みを行うことにした。

《3. 具体的な取り組みの内容》

＜対象＞終末期ケアのお客様 1人を対象とする

＜取り組み期間＞平成26年4月～現在

＜取り組み職員＞中心職員は認知症ケア推進委員会(介護職員5名、看護師1名)その他全介護職員、看護師、理学療法士、栄養士

＜取り組み内容＞お客様の気持ちの把握や、終末期ケアを行う職員の対応の戸惑いなどを全員で共有した。お客様本人への聞き取りから始め、センター方式シート(24時間生活変化シート、24時間アセスメントまとめシート)を活用し、どんなケアを望まれているかを職員全員で探っていった。情報収集の中から見えてきた、ご本人が希望する1日の過ごし方や、好きな食べ物、ご家族との関係性等をケアに活かす為、多職種連携で意見を出し合い統一したケアを決定し実践した。(以下の内容は平成29年10月～12月に実施したものです)

① 食事について

・食事が進まず、食堂から退室しようとしている時に皆はどのような対応をしているか？→ケア者の食べてほしいという気持ちはあるかもしれないが、本人本位で考えると「無理に食べてもらわない」が一番良いのでは無いか。食事を残して車いすを自操している時点で「もういらない」のサインであり、食事量や水分量のムラにとられる必要はないとした。

・小豆缶、みかん缶とコーヒー牛乳が嗜好品の為、家族へ差し入れの依頼をする事で面会の機会になることも期待した。

② 寝たり、起きたりを繰り返す状況について

・時間を伝えるなどしているが、状況は変わらないため本人の要望に合わせてその都度寝たり起きたりを支援した。

・足を下ろしているのが楽なのか、起きたいのかははっきりしなかったが、フットコールセンサーの位置を微調整して対応した。→悪性腫瘍や心不全、腰痛など色々な要因があり、ずっと寝ていること、起きることが辛い。日中過ごす食堂からは居室が遠いため、移動は無理せず介助した。

・本人の辛さを理解しよう。寄り添ってあげようを援助方針に入れた。

③ 家族

・面会に来られなくても、家族写真や手紙などを通して家族とのつながりを持てるようにした。

・ケア者からも家族との思い出など引き出すようなコミュニケーションを図っていった。

《4. 取り組みの結果》

・職員は食事を摂取してほしいと思いが強くなってしまいがちだが、それは本人にとって負担であることが分かった。お客様の快を増やせるように家族に協力してもらい、好きなものを食べてもらうことができた。

・寝たり起きたりする行動に関して職員が分析し悪性腫瘍、心不全、腰痛等の原因からずっと寝ている事が負担であり、起きている事も本人にとって安楽であることが分かった。

・終末期と事例検討の対象ということもあり、以前よりも更に職員と家族の協力体制を築くことができ、面会に来て頂ける回数も増えた。

平成20年から事例検討を継続してきたが初めて終末期のお客様を対象として取り組みを行い、食事面の本人の負担や日中夜間問わず離臥床を繰り返す行動の理由を多職種で分析することができ、本人の辛さを理解し寄り添うようなケアを全職員が統一して取り組むことが出来た。また、事例検討中にお客様も変化されていく中で職員がそれぞれ考え対応する事ができるようになった。

《5. 考察、まとめ》

本人にとっての快と職員が考える快は必ずしもイコールではないと全職員が理解することにより本人本位の視点が大切であると考えた。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

・ユマニチュード入門 本田美和子、イヴ ジネスト、ロゼット マレスコッティ (著)

・認知症レク&ケア大特集 世界文化社

《8. 提案と発信》

事例検討を手段としてチームで取り組むことが、お客様の状況に応じた適切なケアを展開することができます。介護職員だけでなく看護師、栄養士、機能訓練指導員と協力しながらお客様の快を増やしていきましょう。